

震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

臨黄

●妙心寺派 ▽「兵庫県南部地震被災者救援対策本部」（小倉宗徳本部長）は被災者救援募金の他、被災地での“炊き出し”など支援策も検討中。現在、地元関係機関と、内容、日程、実施場所などを調整しているところという。なお今後、本山から人員を派遣して被災者支援活動を展開する場合、既に雲衲とRACKメンバーによるボランティア活動を実施している祥福寺と連携をとって進めることになるもよう

▽薪流会（大井際断総裁、横江令澄会長）は二十三日、神戸市東灘区の本山南小学校で被災者救援の二回目の“炊き出し”を実施する。おでん千人分、ぜんざい三百人分のほか、ドーナツやチョコレートなども用意する。また今後、被災者の“こころのケア”の活動を展開する方針であることから、横江会長ら幹部は実情把握のため周辺地区を歩いて視察する予定。

雲衲も手伝いに...

●永源寺派 平成六年度普通宗会（尾関宗巡議長）が十三日、大本山永源寺に招集された。兵庫県南部地震で第五教区（岡山）、第六教区（広島）の議員が出席できるかどうか懸念されたが、列車を乗り継ぐなどして議員任期最後の宗会に全員出席した

▽「灘の十善寺さんは最初、地震の被害は軽微と聞いていたんですが、詳しく話を聞くと我々が想像する以上に伽藍には被害があり、復興にはお金がかかるようです」と吉川積翠宗務総長。驚いたことに、京都の華厳寺（鈴虫寺）でも地震で地盤がずれて建物が一五センチほど傾いた。松虫寺は特別風致地区なので市の職員がさっそく視察にきて、補修の許可を出した、という。映画村に近い法雲院からも大きな公家の墓塔が二十基ほど倒れたと連絡があり、宗務本所でも改めて震災の被害の大きさを実感させられたようだ

▽灘区の竜泉寺は本欄でも報じたように、基礎の石垣が崩れかけており、住職らは危険を避けていまだ乗用車の中で寝起きしている状態。本堂、庫裡などはいずれ解体しなければならない。「その時は雲水を手伝いに行かせる、と管長さんもおっしゃっています。本山には土木作業用のパワーショベルもあるので、必要なら持ってゆくこともできますよ」と吉川総長。なお、近日中に、吉川総長自身が被災寺院を見舞いに訪れる予定とのこと。

曹洞

義援金は二億三百万円に

●神戸市北区の最法寺住職加藤大真氏（宗議）は自坊の震災被害が軽度にとどまったため、現地で救援ボランティアとして活躍している青年会や永平寺、総持寺の雲衲らの後方支援基地として支援活動を展開している。雲衲らが風呂に入りに来たり、また総代から米や野菜を寄付してもらい、それにミンチ肉二〇キロを添菜してエネルギーを補給するなど「ボランティアに対するボランティア」を行なっている。牛肉を食べて元気を出してもらおうと申し入れたところ、ボランティア側は「固形のものにはあたりはずれが生じるから」とミンチ肉を希望したので、それに応えたという。こんなところにも救援現場でボランティアたちがどれだけ心を配り、神経を使っているかが窺える。

宗務庁は加藤議員に現地対策本部の顧問として助力してほしいと依頼し、本庁との連携体制もようやく整いつつある。三田市の永沢寺（渡辺義弘住職）も遺体の受け入れや被災者に温かい食べ物を炊き出ししたり、ボランティアの後方支援などに積極的に協力している

▽十五日には伊東盛熙宗務総長、服部栄隆教学部長、佐々木孝一総務部長が揃って大阪へ入り、加藤議員、三輪昌伸所長らの案内で神戸市内の八王寺や向栄寺を見舞った。翌日は大阪の宗務所にも立ち寄った。伊東宗務総長は初めての現地入り

▽宗務庁が全宗門寺院に呼びかけた「曹洞宗義援金」は十四日現在で五千六百六十二口、二億三百二万五千二百十二円にのぼっている。また被災寺院に対するプレハブ提供は、現在までに十四カ寺が設置、一カ寺が保留状態となっている

天台

こんな時こそ一隅精神で

▽東海教区の可児光永宗務所長は、十日の一隅理事会に出席し、続いて、十三日の山田恵諦座主一周忌法要に随喜した。可児所長は、群馬・福岡で開催される東西の一隅大会について、「兵庫県南部地震の影響で、開催の可否が心配されていました。こんな時こそ、一隅精神で大復興の盛り上がりと呼びかけ、私たちも実践行に努めねばなりません。両大会は予定どおり開かれることになりました」と語り、東日本大会の準備の有力プレーンとしての意欲をみせていた。東海教区では、震災直後の二十一日、兵庫教区へ取りあえず百万円の義援金を送り、また宗派の一隅運動による義援金も各寺院から続々と本部へ送られている

▽京都教区（松景昭稔所長）でも、一月二十三日から三日間、京都市内の繁華街や各方面で托鉢募金を実施した。寺族の中学・高校生も参加していた。托鉢に参加した延べ人数は七十七人。募金額は八十九万円に上り、これに教区からの二百万円を加えて被災地に送られた。

常楽寺に被災家族疎開

▽長野県上田市別所温泉の常楽寺（半田孝淳住職）に、今回の地震によって、神戸市長田区の会社経営者の甘粕敬史さん一家が一時疎開していた。一家は、夫妻と幼い子供二人の四大家族。家は、幸い倒壊や火災の延焼は逃れたものの、被災直後に二女の利沙ちゃん（三カ月）が水疱瘡になり、長女の佑佳ちゃん（六つ）や妻の英美子さんも風邪で三九度の高熱を出した。そこで、一家は疎開を決意し、甘粕さんの学生時代の友人で、常楽寺副住職の半田孝章氏に依頼し、神戸を脱出して長野に向かった。一家は、常楽寺で温泉に入ったりして静養していたが、元気を取り戻し、神戸に帰ったという。

真宗

門主被災寺院を見舞う

●**本願寺派** 大阪教区（吉川孝臣教務所長）の若手僧侶有志約三十人が、兵庫県南部地震の被災者救援のために「浄土真宗ボランティア大阪」を結成、津村別院内に事務所を構えて二月二十二日から三月いっぱいにかけて炊き出しや倒壊寺院及び周辺民家のかたづけ、被災寺院関係者らの要望の収集、また、被災者のメンタルケアなどの活動に取り組むことになり、教区内の僧侶、門信徒らへ参加、協力を呼び掛けている。この僧侶らは何度も被災地へ足を

運んで勤行奉仕やうどんやぜんざいなどの炊き出し、倒壊寺院のかたづけ、救援物資の配分などに従事。これまでに延べ百五十人の人達がこうした奉仕活動に携わっているが、これまでの活動をベースに、より広範で実情に即した支援活動を展開していくためボランティア組織を結成。十七日には兵庫教区青年僧侶連絡協議会、浄土真宗青年僧侶連絡協議会、各教区のビハーラ関係者などの諸団体と会合を持ち、活動への支援と協力を要請した。また、この日は西宮市で仮設住宅への入居が開始されたが、同市役所の住宅部と連絡をとって二十四世帯分の生活用品のセットを送っている。今後、同会では僧侶、門信徒の別なくボランティア活動への参加を呼び掛けるとともに、主に西宮市の仮設住宅に入居する被災者へ送る生活用品セットへの協力を要請してゆく。生活用品セットに必要な物資は、茶碗（五個）、湯呑み（同）、ガラスコップ（同）、箸・割り箸（五膳）、皿（大小各五枚）、スプーン（五本）、フライパン（一個）、鍋（大小各一個）、ポット（一個）、やかん（一個）、タオル（大小合わせて十枚）、シーツ・タオルケット（五枚）で、これらをダンボール箱等に詰め合わせ、大阪府中央区本町四ノ三の津村別院内の事務局（電話＝〇六－二六五－四四二一、FAX＝〇六－二六五－四四二二）まで送付のこと、物資は全て未使用品に限る。なお、「浄土真宗ボランティア大阪」の事務局員は次の各氏。大畠信隆・正光寺住職、尾崎貞良・西證寺住職、河野通哲・浄願寺住職、吉井章・敬恩寺副住職、若林真人・光照寺住職

▽大谷光真門主は、十七日、兵庫県南部地震で被災し本堂や庫裡が全壊するなど大きな被害を受けた兵庫教区（土基謙教教務所長）の被災寺院十八カ寺を見舞った。また、教務所や神戸市中央区に建築中の別院・教務所の工事現場も視察した

▽十四日付本欄記事中に大谷光明氏が大谷光照前門の「叔父」とありましたのは「父」の誤りです。お詫びして訂正致します。

同朋大学生の奮闘ぶり

▽兵庫県南部地震の被害を受けた現地でボランティア活動を続けている宗門関係校、同朋大学（池田勇諦学長、名古屋市守区）の学生から奮闘ぶりを知らせる「手作り新聞」が連日、同大にファクスで届けられている。宿泊先の難波別院（中林徳雄輪番）から手書きの「新聞」を送信するのは同大社会福祉学科の二年生、宮島智也さん。交通事故から車椅子の生活を強いられながらも参加し、状況や現地での悩みなどを報告している。活動は大阪ろうあ会館、大阪障害者センターをはじめ、神戸や阪神間での障害者やお年寄りの介護や安否の確認、物資の輸送、被災した宗門の寺での支援活動など。ただ、情報不足からせっかくのボランティアが無駄足になったり、安否の確認で門前払いされたりと苦労も多い様子。また、西宮市の溝掃除では被災者から「してもらって当然」という意識で対応されてボランティアの在り方を問い直すなど、暗中模索ながら若い力をぶつけて真摯に取り組んでいる。これは学生たちの発意で始まり、同大学生課が協力。同大がチャーターしたバスで五日に三十一人、十三日に四十四人、個別で出発した三十七人と計百十二人が被災地へ赴いた。同大では「『ともに生きる』ことを理念とする同朋大学生が決して教室では体験できない本当のボランティアの意義を学んでいるようだ」と語っている。

真言

被災者冥福祈って大護摩

●高野山 天動寺（岡本尚龍住職、兵庫県神崎郡市川町）は十一日、神戸市東灘区の私立灘中学・高校で兵庫県南部地震の被災者の冥福を祈る柴燈大護摩供養を執り行なった。同校周辺はとくに被害の大きかったところで、体育館は震災直後から約五百体の遺体が運ばれ、安置所に使われてきた。このほどその体育館が被災者の避難所となり、それを機に学校側が同寺に供養を依頼した。これは同寺の僧侶の一人、土井裕之氏が灘高校で世界史を教えていることが縁になったという

▽当日は体育館で読経して簡単な法会を行なった後、祭壇が設けられた同校グラウンドで導師の岡本住職と同寺の僧侶二十人の出仕により大護摩が焚かれ、高さ四メートルの護摩壇に塔婆が次々と投入された。塔婆は被災者供養のため一万枚が用意されて無料で配られ、参拝者は名前や戒名を記して震災で亡くなった人たちの冥福を祈った。また同じ会場で供養に関する無料相談コーナーも設けられるなど、今回の行事は学生や関連業者など全てボランティアでまかなわれた

▽今回供養を依頼された天動寺は、柴燈大護摩を年に三回焚き上げる寺として有名である。とくに四月末のものは高さ十二メートルの大護摩壇が生まれ、同寺は大勢の参拝者で賑わう。

法華

身延山からは医療班派遣

●**日蓮宗** 総本山身延山久遠寺（岩間日勇法主）では、二日から五日まで、兵庫県南部地震の救援団第二陣を現地に派遣し、災害地を見舞った。このたびの救援団は上田本昌庶務部長をはじめ、中里悠光、佐野智尚、秋山智経、内藤歆祐、池内法悦、松西真隆、山口本晃、町田英昭の各氏に、医療班として身延山病院の関戸清貴院長、河口千秋薬剤師、三塚多恵子看護婦長、さらに看護婦の遠藤あやかさん、吉渡千代子さんらが加わった総勢十四人。今回は風邪薬・胃腸薬千人分のほか、救援物資としてミネラルウォーター千八百本、トイレトーパー三千箱、「身延饅頭」二千箱、手袋三百個、マスク三百個、それに途中の愛知県甚目寺町・妙勝寺（横井一行住職）の檀信徒から寄贈されたタオル千本などを積み込んで現地に向かった。途中、大阪市中央区の雲雷寺（伊丹栄彰住職＝身延山・祖山常置会議員）に立ち寄り、ここを拠点に、大阪本願人会の近藤逞夫会長ら六人も加わって、西宮市と神戸市長田区などを巡回診療しながら、被災した宗門寺院を見舞ったが、なかでも温かいカレーライスの奉仕はたいへん喜ばれたという

▽同救援団は初日、神戸市と並んで被害が大きかった西宮市を訪れ、最初に市内甲陽園西山町にある妙龍寺（戸田教進住職）に向かった。同寺では本堂・庫裡の全壊は免れたが、壁にひびが入り、瓦が落ち、石造りの十三重塔と獅子像が倒壊。一行は戸田住職の案内で、西宮市役所をはじめ、公共施設をまわって救援物資を届けた。次に訪れた浄願寺（富田智妙住職）は本道・庫裡・妙見堂、鐘楼堂が全壊。かろうじて鉄筋コンクリート造りの位牌堂・信徒休憩所は倒壊を免れたということであった。続いて千人を超える被災者が避難している西宮市立中央体育館へ。ここでは身延山病院の関戸院長が罹病している患者の診療を行なったが、特に風邪の人が多く、薬を貰う被災者が後を絶たなかったという。さらに大阪本願人の奉仕団が持参したレトルト食品のカレーライスをガスで沸かしたお湯に入れ、温かくして給仕したところ、これがたいへん喜ばれ、「いま一番欲しいのは仮設住宅だが、次は温かい食べ物」ということで大好評。医療班はこのほか、西宮市上ヶ原四番町市営住宅、同七番町市営住宅、同上ヶ原小学校体育館などを回り、医療活動にあたったが、関戸院長は「インフルエンザをはじめ、高血圧、胃腸障害、ケガなどの患者のほか、挫滅症候群＝身体の一部が長時間圧迫されることにより生じる肝機能障害等＝という新たな病も見られ、改めて精神面に与えた傷の深さを知った」と話していた。次は、火災による被害が甚大だった神戸市長田区へ。はじめに区内本庄町六丁目の私立野田高校体育館に避難している被災者三百五十人への医療救援活動を二日間実施。この体育館には、若いボランティアの看護婦が一人だけだったので、身延山の医療班は大いに喜ばれた。また他の救援団は、兵庫県東部宗務所の太塚泰詮所長（中央区・本妙院住職）を訪ね、子息の太塚泰寛氏（中央区・宇治山寺住職）の案内で、招慶院（兵庫区・内藤泰善住職）、妙徳寺（同・福田淳弘住職）、妙行寺（同・一之宮定住住職）、行守寺（同・清水教信住職）、妙法華院（同・信間智照住職）、法蓮寺（同・内藤慈宣住職）、泰信寺（長田区・夏井龍耀住職）、大圓寺（同・平井妙信住職）、妙覚寺（同・谷口慈忍住職）、さらに最終日には尼崎市の長遠寺（池田博隆住職）、広濟寺（石伏龍齋住職）、伊丹市の本泉寺（益田即選住職）、宝塚市の天光院（辻田観諦住職）、安国寺（川添裕照住職）を回って、救援物資を届けた（個々の被害状況は本欄等の「兵庫県南部地震特報」で既報のため省略）。なお、神戸市長田区・泰信寺の夏井龍耀住職が三日、地震後の過労からくる急性心不全で急逝した。夏井住職は普段から病院通いをしていたが、かかりつけの病院が地震で診療不能になり、適切な処置が

受けられなかったため、死期を早めたとのことであった。これを聞いた救援団では、ちょうど慰問にかけつけた上田庶務部長が導師となって仮通夜を営み、増円妙道を祈念したという

▽身延山では釈尊涅槃会の十五日午前十時から、藤井教雄総務の導師のもと、仏殿において「大震災犠牲者追悼法要」を厳修した。これには千頭和武一身延町長をはじめ、身延山福社会、身延山学園（身延山大学・身延山高校）、身延山病院ら関係機関、さらに身延山本願人会、信徒総代等の関係者ら多数が参列し、このたびの大震災で亡くなった五千三百余人の犠牲者の冥福を祈った。法要に先立ち、まず上田本昌庶務部長から、二回にわたって行なわれた救援活動の詳細について報告があり、また藤井総務からも「犠牲者の諸霊を慰めると同時に、被災された人々が一日も早く立ち直り、復興に尽力されるように心からご祈念申し上げます」との挨拶があった。身延山では、近く救援団の第三陣を派遣すべく計画中で、そのほか身延山学園の学生有志も、春休みを利用して現地を訪れ、復興の手伝いをするとも考えているという。

対策本部に続々義援金

●**本門佛立宗** 兵庫県南部地震（阪神大震災）で宗務本庁は地震発生の一月十七日の夕方から加藤現崇総務部長のほか内田主事、畑中書記らを被災地に急派し、正法寺と佛立寺の被害状況を視察。交通機関の混乱のなかを十八日未明に帰庁した。宗務本庁ではこの報告に基づいて一月十八日付で宗令第十二号「兵庫県南部地震救援対策本部」（本部長＝小山日誠宗務総長）を設置、宗門あげての被災寺院と信者の迅速な救援活動を開始した。ちなみに阪神地区の本宗寺院は十四カ寺

▽同対策本部は全国寺院教会に「緊急連絡」を発して救援活動への積極的な協力を呼びかけるとともに、緊急措置として宗門の災害救済積立金から一千万円を日赤京都支社を通じて、神戸市の救援本部に贈った。緊急要請に応じて早速、本庁にいちばん近い本山宥清寺（住職＝御牧日勤講有）から二百万円、北大阪布教区から百万円が届けられたほか、人的救援活動として、西日本の青年教務十二人が現地に走った。その後、対策本部への義援金は続々と全国の寺院教会から届いている

神社界

再び復興を

●「八幡様は、五十年前の戦災では玉垣と鳥居は残った。しかし今回は全て倒壊してしまった」。兵庫県神社庁の岡田善夫庁長は、兵庫県南部地震発生以来、西宮市の自宅修復作業、全壊した奉仕神社・神明八幡宮の整理、自分が会長を務める公民館の避難民受け入れ作業、そして庁長としての連絡業務などに忙殺される毎日を送っている。岡田庁長の自宅はかろうじて持ちこたえ、幸い岡田夫妻にケガはなかったが、未だガスも水道もない生活が続いている。精神的ショックが大きかった夫人は余震で心臓の発作を起こした。来てくれる医者や救急車も無く、連絡手段もなく、夫人を車椅子で近くの医院までなんとか運んで事無きを得たが、心配で自宅をあまり離れられない。近所家々は殆ど倒壊し、百人近くの人々が亡くなった。近くの公民館が避難所となっているが、同公民館の運営委員会会長も務める岡田庁長は、約三百人の避難民の世話も行なわねばならない。被災民は我慢強く、心温まる助け合いの場面が目立ってはいるが、やはり耐乏生活が長引くとイライラも募り、岡田庁長も対応に苦労を重ねている。また、県内神社の被災状況にも心を砕く。「疲れたとか、もうダメとかは言っておれません」と、岡田庁長は持ち前の剛毅と使命感で自らを支えている。また、こんなときに最も心強いのが、全国の神社関係者から寄せられる激励だという。倒壊した神明八幡神社の復旧云々はまだ全く言える状況ではないが、戦後復興を見事に成し遂げて神社本庁に表彰された経験のある岡田庁長は、「もう一度復興をやれと神様がいつておられる」と神社再建への決意は固い。

大阪

被災地での活動を報告

●**浄土宗** 光聖寺 E d ビル（大阪市天王寺区生玉寺町）で十日、兵庫県南部地震の被災地での救援活動状況を報告する会が開かれ、約三十人が出席した＝写真【写真は省略】。「阪神大震災と仏教者たち」と題して行なわれた報告会では、アーユス・仏教国際協力ネットワークのメンバーの伊藤信道宝泉寺副住職（西山禅林寺派・愛知県津島市）と服部隆志自敬寺副住職（黄檗宗・大阪市）が被災地でのボランティア活動の状況を中心に報告。また、出席者を交えて質疑応答も行なわれた

▽まず、開会に先立ち、出席者全員で黙祷。次に秋田光彦應典院住職が、「この度の大地震では、五千数百人の尊い生命が失われたが、一方で懸命にボランティア活動を行なう人たちの活躍が注目され、その意味が問い直されたように思う」と挨拶

▽次に伊藤氏がスライドを使いながら“読経・回向ボランティア”について報告。伊藤氏は神戸市立ひよどりごえ斎場で茶毘にふされた百十体の供養を行なった。被災直後のため、着のみ着のままの遺族がほとんどで、親族はいなかったという。一方、服部氏は医者から心のケアが必要だと聞き、六甲小学校を中心に“お話ボランティア”を実施。避難所でお年寄りの話し相手や子どもたちの遊び相手などをつとめたと報告した

▽アーユス・仏教国際協力ネットワークは平成五年、宗派を超えて創設された国際協力のボランティアの運動体で、仏教精神を基に幅広い活動を推進している。なお、東京での報告会が三月六日午後七時から、アーユス事務所（東京都江東区清澄三ノ四ノ二二）で開催される

▽藤野立恭教区長の自坊・源光寺（大阪市北区豊崎）の庫裡の屋根瓦がこの度の地震で落ち、現在、雨漏りがしないように応急措置としてシートで覆っている。この屋根瓦を新しく葺き替えると、約五千万円はかかるようだ。藤野教区長は、「できれば修理したいので、業者と交渉をしているところだ」と頭をかかえている。同寺ではこのほか、本堂の壁が落ちたほか、煉瓦塀も一部崩れかかっている。

金光

タイから真心の義援金

●**金光教平和活動センター**（森定斎理事長、事務局＝広島市中区千田町一ノ一ノ三、御幸教会内）に対して一日、タイ最大のスラム・クロントイで十八年間にわたり教育、福祉活動を行なっているドウアン・プラティープ財団から兵庫県南部地震の災害に対する義援金として八十万円（約二十万バーツ）が寄託された。平和活動センターは設立以来六年間にわたって同財団を支援してきており、今回義援金が寄託されたのは、その感謝の意味も込められている

▽日本で地震による大災害が起きたことを知った同財団の事務局長のプラティープ・ウソソントム秦女史は、バンコクのスラムの住人や現地のNGOに呼び掛けて「阪神の被災者に真心を贈るタイの会」を結成し、一月十九日から三十日までに二十五地域のスラムで募金活動を実施。その募金に対して、タイの人々から十二万バーツ（約四十八万円）もの温かい浄財が寄せられた。同財団では、さらに運営基金からの百万バーツ（約四百万円）を加えた総額百十二万バーツ（約四百四十八万円）を義援金として日本に贈ることにした

▽一月三十一日には、プラティープ女史が被災地を見舞うために、夫の曹洞宗国際ボランティア会（SVA）アジア地域バンコク事務所長の秦辰也氏とともに来日。神戸市と同財団が支援を受けている六つのNGOに対して義援金を寄託した。二月一日の朝には、被災地の見舞いのためちょうど大阪に滞在中だった平和活動センター事務局長の熊田信道御幸教会長に、プラティープ女史の宿泊先のホテル「ホリデイ・イン・関西空港」のロビーで同女史から義援金とメッセージが直接手渡された＝写真【写真は省略】。寄託された義援金は、金光教災害対策本部と提携して被災者の援助活動に有効に使用されることになっている

▽平和活動センターが支援しているフィリピンの「カンルンガン・サ・エルマ」、「SRDコンコウキョウ財団」からも地震発生後すぐに、お見舞いのメッセージが同センターに寄せられている。

救世教

川合総長が被災地を慰問

●川合輝明総長は一月三十・三十一日、未曾有の被害を出した兵庫県南部地震の被災地を訪ね、神戸市と淡路島の教団拠点や西宮市内のランチ（信徒家庭）などを見舞った。救世教では被災地の信徒四千人のうち十六人が犠牲となり、約六百軒の住宅が全壊・半壊などの被害を受けた。三十日、東灘区のMOA神戸で行なわれた報告会では、川合総長がブランチャー（信徒）八十人を慰問、被災状況の報告を受けた。この中で総長は次のように語り、被災信徒を激励した。「惨状を目の当たりにして被災したブランチャーの思いは察するに余りある。教団として救援に全力を尽くす所存だ。戦争なら疎開もできるが、予告なしの震災を全てを一瞬にして崩壊させてしまう、『最後の審判』ともいべき大浄化である。その渦中において生死の境を超えて御教えの確かさ、『明主之御神』（岡田茂吉教祖の神名）のご威徳を確信したブランチャーは、紛れもなく明主様（教祖）にとって無くてはならない神柱であり、地上天国建設に欠かせない資格者である。この震災は兵庫県南部に発生したが、光明台（神奈川県箱根町の聖地）と直結したランチが被災したということは、世界救世教が受けた大浄化だと受け止めている。遅かれ早かれ人類が直面するであろう最後の審判を前にして被災したブランチャーは、その大浄化を体験した先達だ。立ち上がっていく尊い事例を多くのブランチャーに伝えてほしい」。

学園

救援物資を届ける

●大阪市中央区本町に本部を置く本願寺派宗門校の相愛学園（伊井智昭理事長）では、兵庫南部地震（阪神大震災）の救援に全校をあげて取り組み、職員が救援物資を神戸市に届けるとともに、本願寺派関係学校の睦学園・須磨ノ浦女子高校（神戸市須磨区御幸町、河野申之理事長）へ同じく救援物資を届けた

▽未曾有の大震災に遭遇して相愛学園でも三百人の学生、生徒が被災していることが判明。中には親、兄弟を奪われた人もあり、学園では訃報に心を痛めている。地震発生のおと間もなく、短大、大学生や父兄を中心に救援の輪が広がり、持ち寄られた物資が一月二十五日、四トン車のトラック四台に満載されて出発した。出発のまぎわまで「被災の人達にあげて下さい」と学生らが握ったおむすびがたくさん届けられた。若い人達の優しさ、被災者を思いやる心にふれて、相愛学園職員は「素晴らしい学園だ」との思いも新たに奮い立ったという。神戸市まで、渋滞のなか六時間をかけて到着。最初に神戸市役所へ物資を届けたあと、須磨区に向かい、須磨ノ浦女子高校へ。創立六十周年の同校は、神戸市内の高校で最もひどい被害を受け、三棟の校舎が完全に破壊されていた。残るのは河野記念堂だけだった

▽相愛学園職員は、同校に着いて間もなく日暮れを迎えた。校庭に避難している人々が暖をとる焚き火に本当に震災の恐さを知るとともに、すさまじい惨状に涙した、と述べている

▽以後も、学生からボランティアで被災地に入りたいという届け出があとをたたないという。
